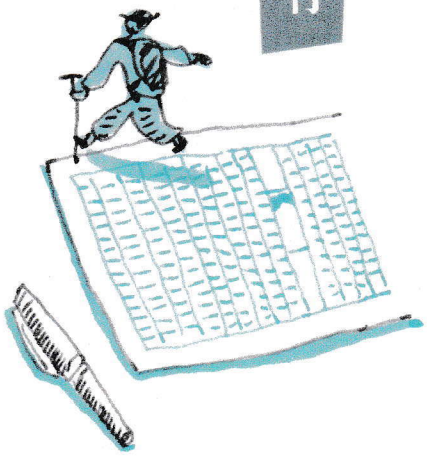

下山 谷川岳西黒尾根

斎藤 勲（新潟県見附市）

六時、谷川岳登山指導センターに登山届を提出し西黒尾根の登山口に向かった。

途中、何人もの若い人に追い抜かれ、オキの耳へは十時頃に着いて眺望を堪能した。ロープウェイを利用して天神平から登って来る人たちもまだ到着せず、静かな山頂である。

台風十九号が接近中で気温は暖かめだが、前日の雨に空気が洗われ富士山、八ヶ岳、赤城山、武尊山、越後三山、苗場山など遠くの山から近くの山まで見える。

俎嵓から主脈稜線にかけては、今まさに幾筋かの雲が上州側から越後側に渡ろうとしているところだ。一幅の山水画のような風景で美しい。トマの耳に立つ幾人かの登山者が逆光に映える。

この日、十月十日は晴れの特異日と信じられている。今日も外れなかった。

幸せなひとときを過ごした後に、下山を始める。肩ノ小屋付近から下山予定の天神尾根の方向を見ると、ロープウェイを利用して天神平から登って来る登山者の長蛇の列である。人混みは苦手だ。登って来た西黒尾根を下ることに変更する。

四月、残雪の肩の広場で一メートル先も見えない濃霧のなか、行く手の目標として懸命に探した石組みの道標の脇から東へ。西黒尾根に再び足を踏み入れる。

ザンゲ岩の頭部北面はようやく少し色づき始めた。その脇に立って下を眺めると、これから頂上へ向かう人のグループが岩尾根を三々五々、登って来ている。

「氷河の跡」と呼ばれている蛇紋岩の一枚岩の割れ目は、登山者の靴底により何十年も磨かれツルツルに光っている。よく滑るから、バランスに気を付けて慎重に下る。

疲れてきた身体でヨロヨロと下山していると、「こんなに急な尾根を前を向いて下って来るなんてスゴイ」と数人のグループで登って来た青年に言われ面くらう。

ブランクもあったが、かつては谷川岳東面の岩場のさまざまなルートを登り、さまざまなルートを下った。

懸垂下降での下りは一ノ倉沢六ルンゼ、衝立岩北稜から衝立前沢、徒歩では一ノ倉尾根から一ノ倉岳経由で中芝新道を下山などだ。

この西黒尾根については下山すること数知れずだが、先の青年のような評価を受けたことはない。五十四年前に十八歳で岩登りを始め、谷川岳東面の岩場にも十年ほどは親しんだ。当時の履き物は、ルート上に残雪があれば革の登山靴、無雪期は薄いゴム底のズック靴であった。カラビナは、まだ鉄製を使っていた。

重い登攀用具が入ったザックを背にズック靴で、飛ぶように駆け下ったものである。当時はまだ西黒尾根を下山するクライマーの姿を多く見かけた。今では登攀終了後、危険が伴う急峻で濡れている草付帯を嫌い、登攀したルートかその近くのルートを懸垂下降するという。そのため、この西黒尾根には登攀を終えて下るクライマーの姿はほとんど見かけず隔世の感がある。

急な岩尾根を黄色ペンキの印に導かれて下って行く。初夏にはマチガ沢側に咲くホソバヒナウスユキソウやサクラソウの群生地も、花のない今はどの場所だったか見当もつかない。

厳剛新道への道を分けガレ沢のコルから少し登りかえして「ラクダの背」で休憩を取る。十二時だ。

残雪期の登りでは行く手の残雪の状況を確認しながらストックをピッケルに持ち替え、アイゼンを着ける場所だ。

さらに下ると鎖場だ。どの山でも登る時には鎖に手を触れない主義だが、下りでは積極的に使う。

蛇紋岩は、ここも靴底でツルツルに磨かれている。若い頃のバランス感覚はもう無い。下りでは頼れる物はすべて利用する。

人見知りの強そうな若い女性が一人登って行く。下山時にすれ違った最後の人だ。この時間だと肩ノ小屋か、その先の避難小屋に泊まるのだろう。

鎖場はすぐに終わり、森林限界から樹林帯に入る。豪雪と岩場の山は標高一四〇〇メートル位が森林限界だ。長い下りに備えて、ストックを準備する。私の下半身は衰え、両手のストックの助けを借りないと、傷んでいる部位に負荷がかかり過ぎる。

眺望のきかない単調な下りはすぐに

「読者紀行オブ・ザ・イヤー 2020」開催します！

読者紀行では、毎月掲載された紀行文のなかから、より優れた作品を表彰する「読者紀行オブ・ザ・イヤー2020」を開催いたします。受賞者には豪華賞品も……？　みなさまの生き生きとした投稿、お待ちしております。

《掲載号》2021年1月号

※応募の詳細についてはP168の「告知板」をお読みください。

飽き、嫌になる。若さ溢れる頃は目標の岩場を登り終えた達成感で胸を膨らませ、土合駅前の土合ハウスに着いたら「ビールとラーメンが待っているのだ」と思いながらリズミカルに山を下った。土合駅まで汽車で往復していた昔が懐かしい。アプローチに車を使う現在は、下山後ビールとはいかない。

何かの工事を進めているのかヘリコプターが爆音を響かせながらひっきりなしに往復している。

送電線の鉄塔が見え始めると登山口は近い。

二〇一八年三月、鉄塔の下でアイゼンを取り出すときに保温ポットをザックの外に出し、そのままその場所に置き忘れた。山での物の置き忘れは、山を汚すことになる。出発の前には置き忘れがないかしっかり確認するのだが、そこでは確認することを忘れたのだろう。老化とはこういうことかと愕然としたものだ。

鉄塔からしばらく下ると旧道の舗装道路に出る。清水峠越えの国道291号である。上州側は各所で崩落、越後側は猛烈な藪で清水峠の先は通行不能といっていい。十四時、指導センターに下山届を提出し下山を終えた。

駐車場のベースプラザから車に乗り、少し進むと慰霊碑の立つ広場だ。

ヘリコプターは、その上の広場でホバリングして荷を下ろしていた。「谷川岳インフォメーションセンター建設」と工事内容の説明看板があった。

浅妻健司＝イラスト

また新たな「箱もの」を造っているのか、と少しがっかりした。慰霊公園の「山の鎮」像や遭難者名が彫られた「過去碑」に心があるならさぞ騒々しく思うだろう。

過去碑に彫られた名前は、記録を始めた一九三一年以来、八百名を超えているという。私と同じ市内の人、隣の市の人、ルートの初登攀者、最強のクライマーといわれた人、山岳雑誌に心を打つ文章を投稿していた女性など多くの名前があるはずだ。

東京緑山岳会会長だった寺田甲子男氏は昭和三、四十年代の谷川岳東面の岩場での遭難の多さを「当時は、谷川岳の登山条例ができて間もない頃だったが、とにかく毎週のように、雨アラレのように、人が降ってきたものだった」としている。当時の岩場での遭難の一面を表わしているのだろう。確保技術も未熟だったのだ。

過去碑の前には四基の供花があった。四日前に慰霊祭が営まれたばかりだ。幸いまだ現世にとどまっている私は、ハンドルを握りながら心のなかで霊安かれと祈りつつ通り過ぎた。

これで私の七十二歳の秋の谷川岳西黒尾根の登山を終えた。この山からヒマラヤ六〇〇〇メートル峰への道が続いていた幸運を思う。年があらたまり三月頃になったら、残雪、陽光の西黒尾根を登りに行きたいものだ。その時、気力、体力が大きく衰えていないようにもう少し精進をしてみよう。

今月の寸評

遠藤甲太＝文

斎藤氏（72）作のタイトルも「下山」。谷川岳の玄関通路と言うべき西黒尾根往復単独行だが、登りの行程はあっさり過ぎ、下山にかかって本題に入る。急峻な道を下りつつ、彼の過去の道筋がしっくりと想起される。みずからの「老い」を通奏低音のごとくに響かせながら……。彼と評者は同年輩、同じ年頃に同じく谷川岳で岩登りを始めた。彼の見聞した諸々はそのまま評者のものと同一。これほど共振れした紀行はめったにない。